

令和6年度 学生自主カリキュラム報告書



和歌山県立医科大学

令和6年度 学生自主カリキュラム報告書によせて

学生部長 金井 克光

令和6年度学生自主カリキュラム報告集が刊行されました。

本年度は、医学部、保健看護学部に加え、薬学部の学生も参加し、多彩な活動が展開されました。本制度は、学生自らがカリキュラムの内容を企画・決定し、研究・調査・研修などに主体的に取り組むものです。本学の教育活動をさらに広げるとともに、学生の探究心を育み、将来の医療人としての成長に繋がる貴重な機会であると考えます。

医学部からは、沖縄戦戦没者遺骨収集や、VRを用いた色覚障害シミュレーターに関する興味深いレポートが提出されました。保健看護学部からは、地域の子育て支援活動や、石川県における災害救護活動に関する詳細な報告がまとめられました。薬学部からは、地域に根ざした薬局や薬剤師の新たな取り組みに関する報告が寄せられました。

いずれの活動も、学生自身の知的好奇心から自主的に取り組まれたものであり、和歌山県立医科大学の学生として誇るべき成果であります。これらの報告や活動を通じて、学部を超えたコラボレーションや人的ネットワークがさらに広がることを期待しております。また、今回の経験は、将来医療人として歩む人生において必ずや有益なものとなるでしょう。

最後に、本カリキュラムにご協力・ご指導くださいました教員、事務職員、関係各位に深く感謝申し上げます。

目 次

令和6年度学生自主カリキュラム報告書によせて

学生部長 金井 克光

「法医学教室からの沖縄戦没者遺骨収集への参加」を担当して・・・・・・・・・・A

法医学講座 近藤 稔和

「VRを用いた色覚障害／視覚障害の体験」を担当して・・・・・・・・・・A

教育研究開発センター 村田 顕也

「地域の親子を対象とした遊びのひろば」を担当して・・・・・・・・・・B

保健看護学部 岡本 光代

「石川県災害ボランティア実施と学生間の交流及びアクティブラーニング」を担当して・B

保健看護学部 狗巻 見和

「地域で先進的な健康サポート活動に取り組む薬局見学とインタビュー」を担当して・・C

薬学部 鈴木 渉太

- 1, 法医学教室からの沖縄戦没者遺骨収集への参加・・・・・・・・・・1
医学部 6年生 安田 啓喜
 3年生 福田 昭斗 小鮎 亜裕美 宗川 桃子
- 2, VRを用いた色覚障害／視覚障害の体験・・・・・・・・・・8
医学部 3年生 鎌田 徳人 野中 逸希
 2年生 講初 莉子 田尻 鈴夏 船田 愛子
- 3, 地域の親子を対象とした遊びのひろば・・・・・・・・・・18
保健看護学部 3年生 神保 志穂 田村 優唯 堀永 日向 宝学 優奈
 2年生 井上 穂乃花 上野 阿紗子 廣井 心愛 平尾 萌恵
- 4, 石川県災害ボランティア実施と学生間の交流及びアクティブラーニング・・・・・・・・23
保健看護学部 3年生 松下 己也 笠松 朋希
- 5, 地域で先進的な健康サポート活動に取り組む薬局見学とインタビュー・・・・・・・・27
薬学部 4年生 西廻 一真 金子 千穂 曾和 穂乃香

「法医学教室からの沖縄戦没者遺骨収集への参加」を担当して

法医学講座 近藤 稔和

私自身がはじめて沖縄における戦没者の遺骨収集事業に参加したのが平成30年8月であることから、今年で7年目となった。その間、新型コロナウイルス感染のパンデミック拡大により、中止が検討されたこともあったが、一度も途絶えることがなく、この事業を継続できたことは、大変有難いことである。当初はたった二人だけの参加であったが、今年度は他大学の先生方や学生を合わせ総勢30人でこの事業に参加した。毎年8月半ばと真夏に実施しているが、言うまでもなくこの時期の沖縄県は高温多湿という過酷な環境であり、長袖・長ズボンを身にまとった状態での遺骨収集は激しい体力の消耗を伴う。その中で学生たちは先頭に立ち山の中を切り開いて進み、一心不乱に洞窟の中で土砂に埋もれている骨片や遺品を懸命に探していた。さらに、発見された骨については、まず人骨であるのかどうかの判断が求められ、人骨と判断されると、人体のどの部位の骨であるのかを判断していくわけであるが、大学の解剖学・骨学で学んだ知識を活用し、学生同士で話し合い、時には先生方に尋ねながら率先して鑑別を行っていた姿勢はとても印象的であった。翌日は、朝から収集した遺骨や遺品についての総合討論に参加し、講義室だけでは決して知ることのできない生きた医学を学ぶことができたであろう。

今回の経験を経て、将来医療に携わるものとしてだけでなく、一人の人間としても成長する中で大切なことを学ぶことができたであろう。

「VRを用いた色覚障害/視覚障害の体験」を担当して

医学医療教育学講座/教育研究開発センター 村田 顕也

本学医学部では、5-6年の臨床実習において積極的にデジタル医療教育用の仮想現実（VR）システムを導入しています。具体的には、①医療現場をバーチャル体験できる「現場体験型VR」と②3次元空間で人体解剖を学習する「3D-CT VR」の2つがありますが、VRの積極的な利用を模索しています。

今回の自主カリキュラムでは、ゴーグルを着用して日常生活に即した現場で色覚異常を実体験できるVR用3D動画を学生達がICTサポーターさんのご協力のもとで作成しました。自主カリキュラム参加者の方に色覚異常についての意識調査アンケートを行い、次に色覚異常についての解説とVRによる色覚異常の模擬体験を実施し、再度色覚異常に関する意識調査アンケートを行い、その変化を検討しています。

色覚検査で異常と判別されても大半は支障なく業務が行えるため、現在では雇用時の色覚検査は廃止されています。ただ、色覚異常がなくなったわけではなく、慎重な対応が要求されます。個人の特性を理解しながら、医療を実践することは、将来医療に携わる者にとっては非常に重要な課題であり、申請者は自主カリキュラムを通してこのことを実体験として学んだと思っています。

最後になりましたが、本カリキュラムにご協力頂いた全ての方々に感謝申し上げます。

「地域の親子を対象とした遊びのひろば」を担当して

保健看護学部 岡本光代

昨年、保健看護学部4年生が2人で立ち上げた子育て支援活動を、後輩が引き継いで実施してくれました。今年は、学生だけでなく、和歌山市子育て支援拠点施設わかば♪のスタッフの皆さまのご協力を得て、賑やかな夏祭りとなりました。昨年の反省や課題を活かして、たくさんのボランティア学生の協力を得て、スムーズな準備や運営ができていました。参加した親子に学生がさりげなく声をかけると、緊張が和らぎ、交流が生まれていました。親子が楽しい時間を過ごし、子育てに対する前向きな気持ちを育むことは、保護者にとっても大学生にとっても有益なことです。また、この経験をきっかけに、地域の子育て支援施設でボランティア活動をしている学生もいます。子どもの発達段階や保護者への子育て支援を学ぶ貴重な機会となっています。このように、学生一人一人責任をもって対象者に関わる姿勢は、今後医療や看護活動で重要になります。とても良い経験学習の機会となりますので、次年度に引き継ぎ、活動が本学に根付くよう、今後も応援していきたいと思っています。

学生自主カリキュラムの実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました、保健看護学部の教員の皆様、学習の機会を与えてくださった住民の皆様に厚くお礼申し上げます。

「石川県災害ボランティア実施と学生間の交流及びアクティブラーニング」を担当して

保健看護学部 狗巻 見和

今回の活動は、「被災地の救援活動に行きたい」、「人の役に立ちたい」、「自分たちにできることをしたい」という学生たちの熱い思いから始まり、石川県能登町での支援活動へとつながりました。

学生たちは事前の準備から主体的に取り組み、限られた時間と予算の中で計画を立て、仲間と協力しながら課題を乗り越えていきました。ボランティア当日だけでなく、そこに至るまでの過程も、大きな学びの機会だったと思います。

学生たちは、被災された方々の生活や地域の様子に直接触れ、報道では伝えきれない現地の実情を肌で感じていたようです。「自分たちの行動は本当に役に立っているのか」、「迷惑にならないようにするには」と自問しながら行動する姿勢から、支援とは何かを深く考えるきっかけにもなったように思います。また、1年生から3年生までの学生が参加していたため、初対面の仲間と協働する中で、チームワークやリーダーシップの重要性を学ぶ貴重な機会にもなりました。

こうした貴重な経験が実現できたのは、学生を受け入れ、温かく支えてくださった現地の皆さまのご理解とご厚意のおかげです。心より感謝申し上げます。また、本活動にご寄付という形で支援をいただいた学内教員の皆さまにも、深く御礼申し上げます。

今回の経験が、学生たちの今後の学びと実践に確実につながっていくことを願っています。

「地域で先進的な健康サポート活動に取り組む薬局見学とインタビュー」を担当して

薬学部 鈴木 渉太

社会・薬局薬学研究室では、全国の医療現場とつながりを持ち、地域医療に関心を持つ薬学生が日々学びを深めています。今回活動に参加した3名の学生も、それぞれが地域における薬局や薬剤師の役割に強い関心を持ち、日頃から積極的に研究や学習に取り組んでいます。

彼らが訪問した広島県呉市発祥の「オール薬局」は、報告書に記されているとおり、地域に根ざした多様な工夫と実践によって、住民の健康を支える重要な存在となっています。県内4地域の薬局を見学・体験させていただいたことは、コロナ禍に入学し、これから5年次の実務実習で初めて薬局に足を踏み入れる学生たちにとって、貴重で刺激的な機会となったことでしょう。報告書からは、医療用医薬品の調剤にとどまらず、薬局を拠点として地域住民や患者さんの健康に幅広く寄与する薬剤師の姿を、学生たちが実感をもって受け止めた様子が伝わってきます。薬剤師は、地域で最も身近でアクセスしやすい医療専門職の一つです。先入観なく、現場に触れた彼らが、今後どのように視野を広げ、行動していくか、大いに期待しています。

今回の学生自主カリキュラムの実現にあたり、多大なるご支援とご協力を賜りました、マイライフ株式会社 代表取締役社長 糸賀 誠 様、常務取締役 佐々木 拓也 様をはじめ、学生を温かく受け入れてくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

法医学教室からの沖縄戦没者遺骨収集への参加



和歌山県立医科大学 医学部

3年 福田 昭斗 小鮎 亜裕美 宗川 桃子

6年 安田 啓喜

担当教員：近藤 稔和

私は今、大学三年生であり、日々大学で医学に関する基礎知識を学んでいる段階である。大学では様々なことを学ぶが、それがどこでどのように役に立つのかを実際に体験する機会はまだ少ない。そのような時に、法医学教室の近藤教授から沖縄県での戦没者の遺骨収集事業のお話を伺った。私は大学の授業で学んだ知識を発揮するいい機会だと考えた。この事業が、法医病理学会が主催する社会貢献事業であるということも知り、自分の知識がどのように社会に貢献できるのかを知ることができると考えた。また、私は中学生の時に修学旅行で沖縄に行き地上戦についても学んだこともあり、戦争が残したものは何かをこの目で知りたいと感じた。そして、一つでも多くの遺骨を遺族のもとへ還したいと思い、この事業に参加させていただいた。

（目的）

沖縄戦没者遺骨収集事業としては、一つでも多くの遺骨を遺族のもとへ還すことである。

私たちはさらに、遺骨収集や骨の鑑別において、私たちが習った骨学や法医学の知識を活用しながら自分たちの足りない点を確認しこれからの学びに生かすことや、私たちの知識がどのように社会に貢献できるのかを知ることが目的である。

(方法)

- ・実施日

2024 年 8 月 17 日

- ・実施場所

沖縄県糸満市金城付近の 4 か所のガマ（自然洞窟）とその周辺

- ・参加者

和歌山県立医科大学 客員教授 1 名・教授 1 名・他 5 名

久留米大学 教授 1 名

長崎大学 教授 1 名・他 7 名

香川大学 教授 1 名・他 2 名

大阪医科薬科大学 教授 1 名・他 2 名

日本歯科大学 教授 1 名・他 1 名

ボランティア 6 名

- ・内容

ガマに入り、土砂をよけながら骨や遺品を探し出した。その後、収集された骨一つ一つを鑑定し、人骨であるのかどうか、どの部位の骨なのかを推定するとともに、遺品の発見状況から当時のガマの様子や、ガマの中にいたであろう人物の詳しい情報や遺品との関係性を考えた。

(結果)

今回の活動を通して、5 柱、ないし 6 柱の遺骨を収集することができた。そのほかそれぞれのガマからたくさんの遺骨や遺品、骨片が収集された。4 か所のガマをガマ 1、ガマ 2、ガマ 3、ガマ 4 と適当に区別し、収集されたものを以下に記す。

- ・ガマ 1

成人男性のものと思われる上腕骨, 肩甲骨, 大腿骨, 脛骨の一部、獣の大腿骨、歯牙 2 本

図 1 上腕骨の一部



図 2 大腿骨の一部



図 3 脛骨の一部



図 4 歯牙 1



図 5 歯牙 2



- ・ ガマ 2
長管骨の一部

- ・ ガマ 3

成人男性のものと思われる足根骨の一部、中足骨、頭蓋骨の一部、茶碗の破片、陶器の破片、日本軍のガスマスクのベルトのバックル、薬瓶の破片、鏡の破片、釘(4本)、がま口財布の金具、日本兵の軍服のボタン、50 銭硬貨、手榴弾、歯牙 3 本

図 6 足根骨



図 7 頭蓋骨の一部



図 8 ガマ 3 から収集された遺品



図 9 手榴弾（不発弾）



図 10 歯牙 3



図 11 歯牙 4



図 12 歯牙 5



・ ガマ 4
歯牙 1 本

図 13 歯牙 6



（考察）

私たちは今回遺骨の発見された場所から、5柱ないし6柱の遺骨を収集できたと考えた。今回、ガマは4つあり、それぞれから遺骨が発見されたが、ガマ3については足根骨と頭蓋骨は離れた場所から発見されたため別の人物のものであると考えた。そのため、遺骨からは5柱の遺骨である可能性が高いと考えた。歯牙は6本見つかったため、6柱の可能性もあると考えた。

遺骨からの性別や年齢の推定については、骨の太さや密度をもとに行った。また、ガマ3からは日本兵の軍服のボタンが発見されたことから、日本人の男性がいた可能性が高いと考えられた。そして歯牙からも、年齢等の推定を行うことができ、歯の形状や、少し進んだ歯の摩耗の様子などから今回収集されたのはアジア人種の中年から高齢期の人のものであると推定できた。

（まとめ）

私は今回の沖縄遺骨収集事業を通して、普段大学の講義室で学んでいる知識だけでなく、現場で使われる医学の一部を学ぶことができたと感じた。例えば、私たちは講義室では模型となるきれいな骨しか扱ったことがなかった。しかし、今回はきれいな形の骨の方が少なく、そこから骨の部位の特定や骨の遠位近位の特定をする必要があった。その際には先生方とともに細かな太さの違いや骨にある粗面からも推定した。他にも、頭蓋骨の隆起部分から内側か外側かを区別するなど、学生として習っていたはずではあるが実際には自分自身で活用できなかった知識がたくさんあり、もう一度勉強してきた内容を見返すいい機会となった。

そして、今回実際に、ガマに入り収集事業に参加することで、夏のガマの暑さを肌で感じ、火炎放射器などで焼かれたと思われる壁面を目の当たりにした。これらを通してガマに入っていた人々の苦しみや、戦争の悲惨さを改めて実感することができた。

また、私は医学と社会のつながりについても考え直すことができた。医学と言えば病院での医療などを考えるが、今回、正確な遺骨収集を行うにあたり、形質鑑定やDNA鑑定などで医学知識は必要不可欠であった。私が将来医師となった時はより広い視野を持ち、様々な場面で社会に貢献していきたい。

（出典）

写真は日本法医病理学会の提供

VR をもちいた色覚障害/視覚障害の体験

和歌山県立医科大学 医学部

3 年 鎌田 徳人 野中 逸希

2 年 講初 莉子 田尻 鈴夏 船田 愛子

担当教員：村田 顕也

目的

色覚とは、色を感じて見分ける力である。光の受容は網膜の視細胞により行われ、視細胞のうち錐体細胞で色は識別される。錐体細胞は、赤、緑、青それぞれに敏感な L 錐体、M 錐体、S 錐体に分けられる¹。

色覚異常とは、正常とは異なった色の感じ方・見え方を行うことである。どの錐体細胞に異常が生じるかによって、分類できる。L 錐体に異常があるものを 1 型色覚、M 錐体に異常があるものを 2 型色覚、S 錐体に異常があるものを 3 型色覚という²。色覚異常をもつ方がどのような見え方をするのか、学習した。

この学習を踏まえ、VR を用いて大学祭で色覚異常の見え方の模擬体験を行い、色覚異常に対する認知を一般に広め、認知度や意識の変化の結果を統計的に分析する。

その際、VR 体験前後での、色覚異常への認知の変化を調べ、VR の有効性を明らかにする。

方法

まず回答者のプロフィール、色覚異常に対する認知度、少数派である色の見え方に対する受容度および認識、色覚異常を持つ人への関わり方に関してアンケート調査（別紙 1）を行った。

回答終了後、色が見える仕組みや色覚異常についての説明（別紙 2）を行い、その後 VR を用いて色覚異常の見え方の模擬体験を受けさせた。VR 体験後、色覚異常の見え方・色覚異常に対する認知の変化・色覚異常に対する接し方についてアンケート調査（別紙 3）を行った。回答終了後、色覚異常の見え方・検査方法・工夫に関しての説明を行った。

本調査で VR 動画を作成するにあたり、色のシミュレーター³を参照した。動画の内容は 1 型 2 色覚の色覚異常をもつ友人と 1 日を過ごすというものであった。大学への登校、ジュースを飲む、講義のレジュメを見る、学食のメニューを見る、公園で弁当を食べる、帰宅する、のようにストーリーを作成した。場面ごとに色覚異常の見え方を提示した。VR

^{1,2} 病気がみえる vol.12 眼科. 株式会社メディックメディア. 2024. P.17, P.60-61

³ 田村繁治, 安藤昌儀, 石井拓, 東川幸嗣, 岡本洋輔, 茂里康. 「先天性色弱者の色識別能力を改善する技術開発の歩み」『和歌山医学』, 74 巻, 3 号, pp. 105-110.

動画の最後の場面では色覚異常の見え方は提示せず、VR 体験後のアンケートで、その場面で色覚異常の見え方はどのようなものであるかを回答させた。

結果

被験者は 29 人であった。

分析内容は以下の通りである。

- ①年齢と職業の関係
- ②年齢と知識の関係
- ③職業と知識の関係
- ④色覚異常に対する印象と知識の関係
- ⑤色覚異常と検査の関係
- ⑥知識と VR 後の接し方イメージの関係
- ⑦VR 後の接し方イメージと色覚異常をもつ人が困っていた場合の声掛けの関係
- ⑧過去に色覚異常をもつ人とかかわった経験と VR 前の接し方イメージの関係
- ⑨意識と接し方イメージの関係
- ⑩VR 映像を見る前後における接し方イメージの変化
- ⑪VR 映像を見る前後における色覚異常に対する印象の変化
- ⑫本体験の前後における知識の変化
- ⑬画像問題の正答率(詳細は後述)
- ⑭あった方が良いと思う色覚異常に関する工夫

①年齢と職業の関係

29 人の年齢と職業は以下の通りであった。

年齢/職業	医療系	非医療系	学生
10 代以下			2
10～20 代	1		9
30～40 代	1	7	
50～60 代	2	7	

②年齢と知識の関係

本体験に参加した 29 人のうち、年齢と知識の有無の関係は以下のようになった。ただし知識については聞いたことはあるが具体的に知らない場合を知らなかったとして分類した。

年齢/知識	しっていた	知らなかった
10 代以下		2
10～20 代	4	6
30～40 代	3	5
50～60 代	1	8

③職業と知識の関係

職業と色覚異常の知識の分布は以下のようになった。

職業	知っていた	知らない	合計
医療系	2	2	4
非医療系	6	19	25
合計	8	21	29

④色覚異常に対する印象と知識の関係

色覚異常に対する考え方（おかしい/おかしくない）と知識の有無についての関係を調べたところ以下の表のようになった。

知識/考え方	おかしい	おかしくない	合計
知っていた	1	7	8
知らなかった	9	12	21
合計	10	19	29

⑤色覚異常と検査の関係

本研究では、色覚の異常を持つかどうかについて、簡易的に調べたが、大きな異常を持つ人はいなかった。ただ、検査をしたことはないがすこし違和感を感じると回答した人が2名いたため、色覚の検査およびその他眼科疾患の検査の検討もしくは推進を図る必要があると考えられた。

⑥知識と VR 後の接し方イメージの関係

知識の有無と VR を見た後での接し方のイメージについて分析を行ったところ、以下のような結果となった。

知識/接し方	はい	いいえ	合計
知っていた	8	0	8
知らなかった	17	4	21
合計	25	4	29

⑦VR 後の接し方イメージと色覚異常をもつ人が困っていた場合の声掛けの関係

VR 視聴後の接し方のイメージができるか、と色覚異常をもつ人が困っていた場合に声をかけるか、についての関係は以下の表のようになった。

VR 後/声掛け	はい	いいえ	合計
はい	24	1	25
いいえ	4	0	4
合計	28	1	29

⑧過去に色覚異常をもつ人とかかわった経験と VR 前の接し方イメージの関係

過去に色覚異常をもつ人とかかわった経験の有無と、VR 視聴前の接し方イメージの可否の関係は以下の表のようになった。ただし、「どちらかというところ」は「できる」、「どちらかというところ」は「できない」と分類した。

経験/接し方イメージ	できる	できない	合計
はい	3	0	3
いいえ	12	14	26
合計	15	14	29

⑨意識と接し方イメージの関係

知識の有無と接し方イメージの可否の関係は以下の表のようになった。

知識/接し方イメージ	できる	できない	合計
知っていた	3	5	8
知らなかった	10	11	21
合計	15	14	29

⑩VR映像を見る前後における接し方イメージの変化

VR映像を見る前と見た後の接し方イメージの可否の変化は以下の表のようになった。

VR 前/VR 後	できる	できない	合計
できる	14	1	15
できない	11	3	14
合計	25	4	29

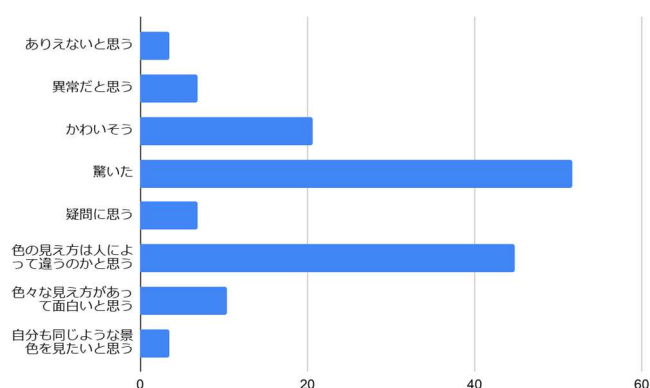
⑪VR映像を見る前後における色覚異常に対する印象の変化

VR映像を見る前と見た後の色覚異常に対する印象の変化は以下の表のようになった。

なお、回答内容を次の基準の通りに分類した。「ありえないと思う、異常だと思う、かわいそう」は「おかしい」、「色々な見え方があって面白いと思う」は「おかしくない」、「驚いた、疑問に思う、色の見え方は人によって違うのかと思う」は「どちらでもない」、「どちらでもない/おかしくないが同数の場合」は「おかしくない」とした。

VR 前/VR 後	おかしい	おかしくない	どちらでもない	合計
おかしい	5	0	5	10
おかしくない	4	4	11	19
合計	9	4	16	29

また回答率をグラフ化すると次のようになった。



⑫本体験の前後における知識の変化

本体験を受ける前と受けた後の知識の変化は以下の表のようになった。

VR 前/VR 後	わからなかった	もともと知っていた	事前説明ではわからなかったが、VRで理解できた	事前説明で理解、VRで理解が深まった	合計
どういものなのかもともと知っていた	0	1	1	6	8
聞いたことはあったがどのようなものか知らなかった	0	1	5	12	18
初めて知った	0	0	1	2	3
合計	0	2	7	20	29

⑬画像問題の正答率

VRを見た後、色覚の人に起こりうる支障について設問を出した。今回の色覚の例では、赤と緑の区別がつかなくなる事例（P, 1型2色覚）をとりあげたため、歩道信号、車道信号の青と赤の区別がつきにくく、また暗闇の中で自動車のテールランプ/ブレーキランプの赤色が茶色もしくは黒に近い色にみえるため先行車の動き分かりにくい。そのため本設問では支障が出るものとして、「歩道信号、車道信号、自動車」を正答とし、正答数で1, 2, 3点とした。ただし、誤った選択肢として用意した「横断歩道」と回答した1名については0点とし、「わからない」と回答した人も0点とした。点数の分布は以下の通りになった。

点数	件数
3点	5人
2点	13人
1点	7人
0点	2人
無回答	2人

次に具体的な支障についての結果は以下の通りとなった。なお自由記述のため複数列举した人もいたが、それらは全て色の区別ができないという理由に起因するもののため色の区別ができないという項目に分類した。

支障	件数
色の区別ができない	16
間違えて進んでしまう	1
ブレーキの色の判断がつかない	1
ひかれる	1
無回答	10

⑭あった方が良くと思う色覚異常に関する工夫

分析対象ではないが、本体験を経てあった方が良くと思う色覚異常に関する工夫を参加者から募ったため、一部文章を修正/類似内容を省略して回答内容を以下に示す。

- ・ユニバーサルカラーのような誰でもちがいがわかるような色を使う。
- ・判別が難しいとされる色の隣に名前を書く、というように文字で示す。
- ・色覚異常であると周りの人が気づけるように工夫する。
- ・信号では、青になったら音が鳴らない信号もあるので、鳴るようにする。
- ・色覚異常の方用のコンタクトもしくは眼鏡を開発する。
- ・形をもって表現する。 信号→○△×など。
- ・外に出るときに誰かと一緒に行く。

考察

②年齢と知識の関係

当初、年齢が高ければ、知識をもっている確率が高いという仮定を設けた。年齢は20代までと30～60代がそれぞれ12人、17人であったため、その2階層に分けて χ^2 二乗検定を行ったところ、 $p=0.561$ となり、有意差は認められなかった。そのことから年齢によって知識に大きな差があるとは考えられない。

③職業と知識の関係

職業が非医療系であれば色覚についての知識を持っていない割合が多いという仮定をたてて χ^2 二乗検定を行ったが、 $p=0.280$ となり有意差はなかった。これらより、年齢と知識、環境（職業）と知識の有無については一概に関係しているとは言い切れず、色覚について学ぶきっかけに関する他の要素についても模索する必要があると考えられた。

④色覚異常に対する印象と知識の関係

おかしい	おかしくない
34.5%	65.5%

割合は上記のようになり、 $p=0.124$ であったため有意差は見られなかったが、割合としておかしいと回答した人は全体の 35%いた。これは今回の研究で参考にした先行研究と同じ数値であったため、どの層をとってもやはり 3 割ほどは誤った認識をしていると考えられる。

設問の聞き方について、おかしいと思いますか？と聞いているため、色覚に対して正しい認識を持っていたとしても潜在意識としておかしいと考えてしまう可能性は考えられる。ただし最初に色覚についてという設問であることは明白なため、色覚について色の見え方の多様性のことについて聞いているというのは容易にわかるとも考えられる。どちらにせよ、誤った認識や正しい知識を知らない人が一定数いることは明白なため、啓発活動は重要であると言えるだろう。

⑥知識と VR 後の接し方イメージの関係

もともと知っていた人は接し方のイメージがついており、また知らなかった人の大半が VR を視聴した後で接し方のイメージがついたため VR を視聴することの効果十分あると考えられる。

⑦VR 後の接し方イメージと色覚異常をもつ人が困っていた場合の声掛けの関係

$p=0.684$ となり、有意差は見られなかったが、VR を視聴することでイメージがつき、困っている人に声をかけやすくなっていると考えられる。

⑧過去に色覚異常をもつ人とかかわった経験と VR 前の接し方イメージの関係

過去に色覚の人とかかわったことがある人は接し方のイメージがついている一方で、関わったことがない人はイメージがつきにくいという傾向が見られたが $p=0.078$ であったため、有意差は見られなかった。

⑨意識と接し方イメージの関係

$p=0.474$ であり、有意差はなかった。また接し方が想像できる人のうち、知識がある人は 5 人、知識が無い人は 10 人と、無い人の方が多かったため、仮定に反し、知識の有無と接し方には大きな関係はないと考えられる。しかし、知識がある人に関しては接し方が想像できる人の方が多く、知識が無い人に関しては想像できない人の方が多いため、知識があることによる影響は少しだけ見られたと言える。

⑩VR 映像を見る前後における接し方イメージの変化

$p=0.249$ であり、有意差は無かった。しかし、VR を見る前に接し方が想像できなかった人のうち、VR 後にできるようになった人が 11 人、できない人が 3 人と、できるようになった人の方が多いため、VR 映像の効果は接し方の想像に役立った可能性は高い。また

VR 前には想像できていたが VR 後に想像できなくなった人が 1 人いたため、VR 映像と見る前に持っていたイメージと VR 映像の内容が違っており、接することに自信が無くなるという場合も考えられる。

⑪VR 映像を見る前後における色覚異常に対する印象の変化

色覚異常をもつ人に対し、VR 前におかしいと感じていた 10 人のうち半分が、どちらでもないとされる回答をしていたため、VR 映像による印象の改善の効果はあったと考えられる。また VR 前におかしくないと感じていた人のうち 4 人は VR 後におかしいと感じるようになっていくことに関しては、仮定 5 の考察と同様に、もともとあった色覚異常のイメージと VR 映像の内容に違いがあったために印象が変化したのだと考えられる。また「色の見え方は人によって違うのかと思う」が先行研究では最多、本研究では 2 番目など、様々な部分で違いはあるが、全体的には回答率が近いといえる。

⑫本体験の前後における知識の変化

VR 後にわからなかったと回答した人は 0 人であり、事前説明での理解と VR で理解が深まったと回答した人が 20 人と大部分を占めたため、VR 映像は十分に色覚異常の理解に役立ったと考えられる。

⑬画像問題の正答率

点数の分布より、点数の平均は 1.778 点となっており、平均して 59.3%の正答率であったことが分かる。よって、VR を見ることで十分とは言えないものの理解が深まっているということは可能であると考えられる。ただし複数回答であったことを考慮するとどうしてもそれぞれの注目度によって選択の有無が変化するため理解が十分ではなかったと言い切ることも難しい。よって、次回は理解度をより厳密に図るための選択肢などを検討してもよいと思う。

具体的な支障についての結果より、間違っ進んでしまう、轢かれる、ブレーキの色の判断がつかないについてはどれも色の区別ができないことに起因するため、色の区別ができないと回答していると考えられる。色の区別ができないことに起因すると回答したのは 65.5%であり、多くの人が色覚の大きな特徴である色の区別ができないということについて理解ができていると考えられる。このことから VR での理解促進効果は一定数あると思われる。

結論

本研究では有意差が見られなかったが、被験者が 29 名と少ないことや、年齢や職業の回答者の偏りが影響していると考えられるため、この先同様の研究を行う際には、より多くの被験者を対象にすることで確かな結果を示していきたい。

本研究を通して、色覚異常について知らない人や、誤った認識を持つ人は一定数いると考えられた。色覚異常をもつ人が過ごしやすいように、理解を促す啓蒙活動を行っていく必要がある。また、検査をしたことはなかったが違和感を持つ人はいたので、検査は推進

すべきである。

他にも色覚異常の VR 映像を参加者に見せた結果、理解が進む、印象が改善する、という傾向が見られた。資料や口頭による説明も大切だが、やはり視覚的にわかりやすい VR はより効果的だったのだろう。舘ら(2011)は、バーチャルリアリティの三要素として、人間にとって自然な 3 次元空間を構成している「3 次元の空間性」、人間がその中で、環境との実時間との相互作用をしながら自由に行動できる「実時間との相互作用性」、その環境と使用している人間とがシームレスになっていて環境に入り組んだ状態が作られている「自己投射性」があり、この三要素を考慮して的確に抽出し、生成して被験者に与えれば、現前しているのと同等の効果を引き起こし得る、と述べている。このような VR の効果が、本研究の結果につながったのだろう。また、株式会社往来(2021)は、エンタメや教育、トレーニングといった様々な分野に VR が大きく進出していることを示している。すなわち、今後さらに進化する VR を利用することが、より深く、そして広く色覚異常の理解を進める一助になるだろう。

文献

辻ら(2021) “色に関する正しい知識の認知度向上にむけた研究” , JSSD
医療情報科学研究所編, 病気がみえる vol.12 眼科 第 1 版, メディックメディア, 2019, 312p
舘暲ほか, バーチャルリアリティ学, 日本バーチャルリアリティ学会, 2011, 384p
株式会社往来, 未来ビジネス図解 仮想空間と VR, 株式会社エムディエヌコーポレーション, 2021, 167p

VR色覚体験会 アンケート

d2266023@wakayama-med.ac.jp [アカウントを切り替える](#)



共有なし

* 必須の質問です

年齢 *

- ☐ 10歳以下
- ☐ 10代
- ☐ 20代
- ☐ 30-40代
- ☐ 50-60代
- ☐ 70歳以上

事前アンケート

職業 *

- ☐ 中高生
- ☐ 大学生(非医療系学部)
- ☐ 大学生(医療系学部)
- ☐ 医療従事者
- ☐ 医大関係
- ☐ 会社員
- ☐ その他

色覚異常について知っていましたか

- ☐ どういうものなのかもともと知っていた
- ☐ 聞いたことはあったがどのようなものか知らなかった
- ☐ 初めて知った

あなたは色覚異常と診断されたことはありますか

- ☐ はい
- ☐ いいえ
- ☐ 検査をしたことはないが色の見え方に違和感を感じたことがある

横の四角(●)は何色に見えるか *

- ☐ 緑
- ☐ 茶色
- ☐ こげ茶色
- ☐ 青緑色
- ☐ 赤色
- ☐ その他

上記であなたが選択した色と全く異なる色を選択した人がいた場合、どう思いますか。 *

- ☐ おかしいと思う
- ☐ 少しおかしいと思う
- ☐ あまりおかしくないと思う
- ☐ おかしくないと思う

選んだ理由を教えてください

回答を入力

過去に色覚異常を持っている人と関わったことがありますか。わからない場合は *
いいえを選択してください。

- ☐ はい
- ☐ いいえ

色覚異常を持つ人への接し方は想像できますか

- ☐ できる
- ☐ どちらかというとできる
- ☐ どちらかというとできない
- ☐ できない

VR体験後アンケート

画像はりょうと別れた後に見た一場面のイメージです。りょうならこの場面のどこに支障が生じるおそれがあるでしょうか。複数選ぶことも可能です。またそれはどのような支障だと思いますか。

- ☐ 歩道信号
- ☐ 車道信号
- ☐ 自動車
- ☐ 横断歩道
- ☐ わからない

どのような支障かおしえてください

回答を入力

映像内で色覚異常を持つ人が見るイメージを提示しましたが、このような見えかたについてどう思いましたか、近いものを選択してください。複数選択可能

- ☐ ありえないと思う
- ☐ 異常だと思う
- ☐ かわいそう
- ☐ 驚いた
- ☐ 疑問に思う
- ☐ 色の見え方は人によって違うのかと思う
- ☐ 色々な見え方があって面白いと思う
- ☐ 自分も同じような景色を見たいと思う
- ☐ 特に何も思わない
- ☐ その他

今回の体験による色覚異常に対する認識の変化としてもっとも近いものを選択してください

- ☐ もともと知っていた。
- ☐ 事前説明で理解、VR で理解が深まった
- ☐ 事前説明で理解、VRではいまいち理解が深まらなかった
- ☐ 事前説明ではわからなかったが、VRで理解できた
- ☐ 事前説明でもVRでもいまいち理解できなかった

色覚異常をもつ人がいた際の対応が想像できるようになりましたか *

選択 ▼

色覚異常を持つ人が色覚異常のある方が困っていたら積極的に声をかけたひ手を * 貸したりしようと思いますか。

- ☐ はい
- ☐ どちらかというとはい
- ☐ どちらかというといいえ
- ☐ いいえ

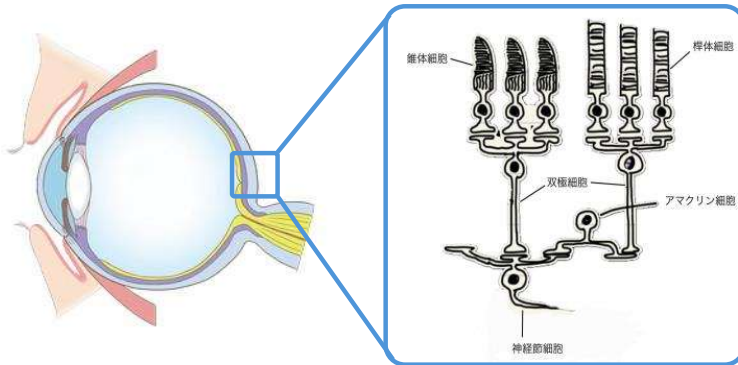
あったらいいと思う色覚異常の方に対する日常の工夫はありますか

回答を入力

送信

色の見え方ってなんだろう

色が見える仕組み



視細胞は暗い所で働く桿体細胞と明るい所で働く錐体細胞に分かれます。さらに錐体細胞は赤、緑、青それぞれに敏感なL錐体、M錐体、S錐体に分かれます。

光は硝子体を通して網膜にたどり着きます。網膜の視細胞で光を感知し、電気信号に変換します。双極細胞、神経節細胞を通して、脳へ伝えられます。

色覚異常とは

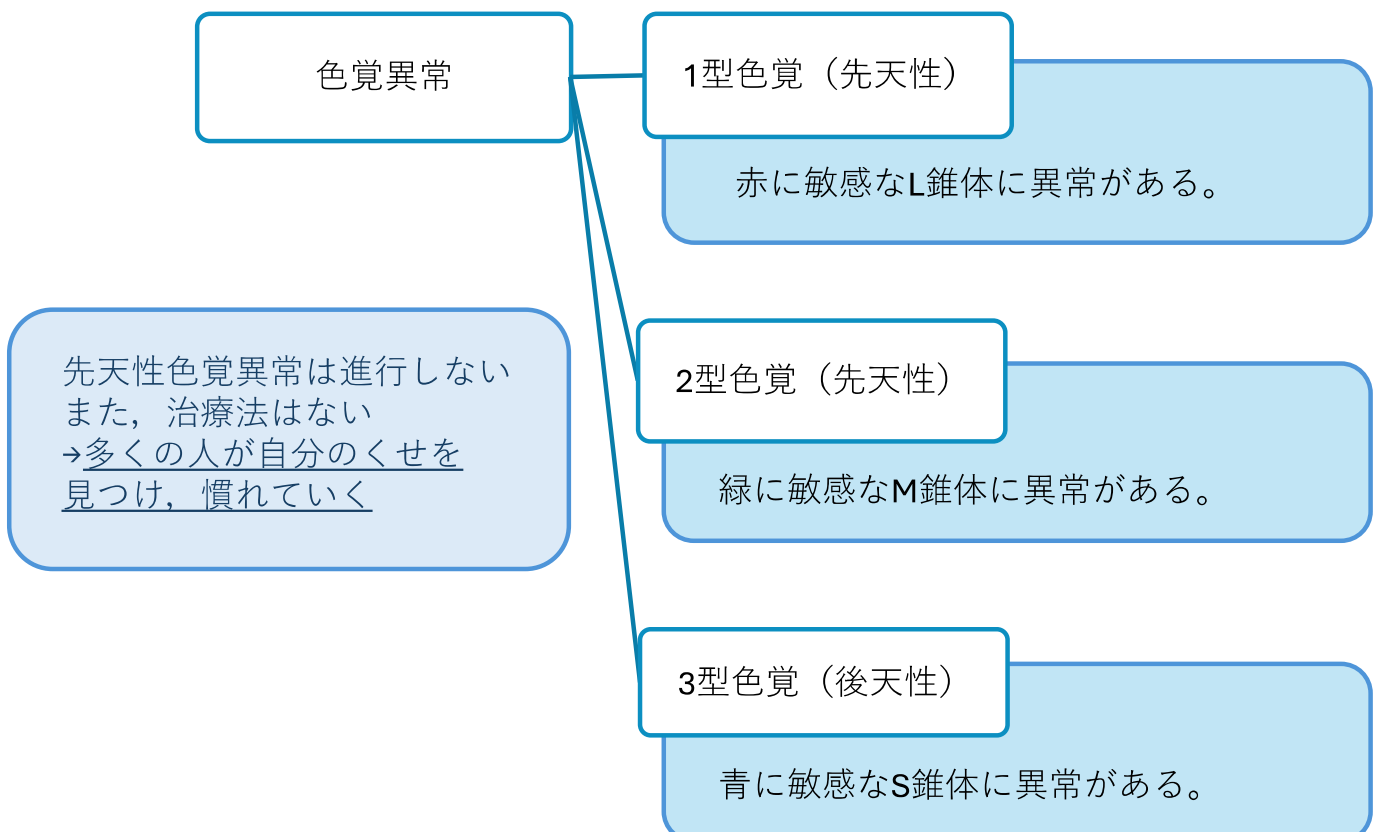
正常とは異なった色の感じ方・見え方をすることです。

日本人の場合、男性の5%、女性の0.2%にみられるといわれています。

(男性に多いのは、色覚に関する遺伝子がX染色体上にあり、それが一つしかないため)色覚異常が問題となる職種も存在します。

例:電車の運転手、パイロットなど(信号を見誤ると危険に直結する)

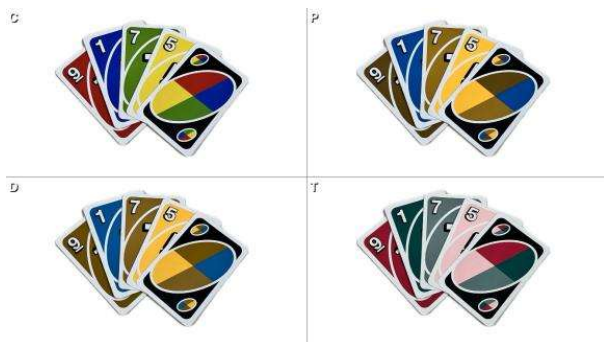
色覚異常はどの錐体に異常が生じるかによって3種類に分けられます。



実際の見え方は人それぞれで、その強弱はグラデーション様になっています。

よくある見え方の違い

UNO

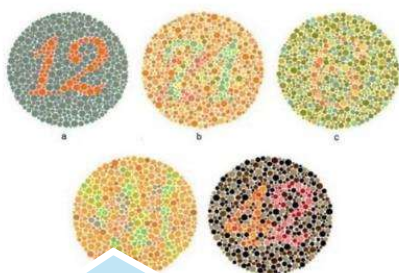


焼肉



色覚異常を持っていても自分の中で癖を見つけて気づかずに過ごしている方も多くいます。

検査方法



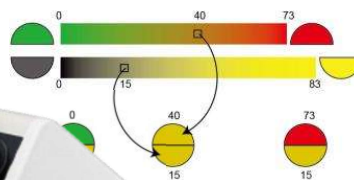
石原色覚検査表

数字や記号を読み取ることで、色覚異常の有無を調べる。



アノマロスコプ検査

上下の色を合わせることで、錐体の機能を確認する。



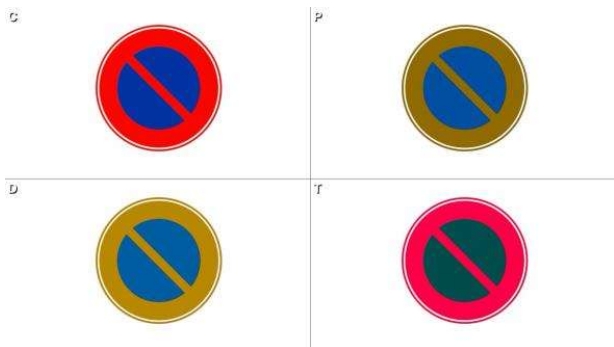
パネルD-15

色を並び替えることで、色覚異常の程度を調べる。

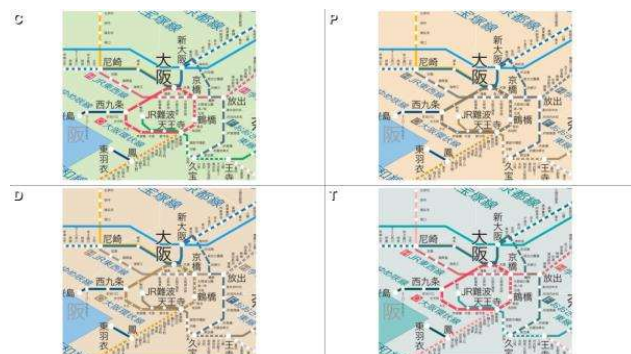
2003年までは学校での検査の施行義務がありました。

身近で見られる工夫

道路標識



駅の線路表



地域の親子を対象とした遊びのひろば「さまふえす」

和歌山県立医科大学 保健看護学部

3年 神保 志穂 田村 優唯 堀永 陽向 宝学 優奈

2年 井上 穂乃花 上野 阿紗子 廣井 心愛 平尾 萌恵

指導教員：岡本 光代

1. 活動の概要

令和6年8月25日（日）に、和歌山市内の0歳から3歳までのお子さんとその兄弟・家族を対象に、夏祭りを開催した。当活動は、子育て世代のネットワークを促進及び、児の発達・社会性を促進する機会とした。また、親と児が笑顔でいきいきと触れ合っている姿を学生がそばで感じることで、結婚や子育ての肯定的な側面を知ってもらうことを目的として、企画した。

2. 目的

私たちがこのイベントを企画した動機として以下の二点があげられる。① 児の社会性獲得障害、親子の社会的孤立が生じてきている。② 若者の抱く育児・出産の印象がネガティブなものになりやすく、子育てをしたいと思えない若者が増えている。

動機①について、授業の中で、1. インターネットの発達・技術の進歩から、リアルでの地域の繋がりが減少し、親同士・児同士の交流が希薄化している 2. 核家族化が進み、児及び親の支援をする人がおらず、頼れる人が身近にいない人の増加 という現状があることを知った。

動機②について、昨今経済的な負担、子育てに対する不安などについて現在いろいろな施策が行われている中で、z世代の半数以上は、子供を持ちたいと思えないというデータがある。SNSやメディア等で経済的負担や、育児負担などの抽象的な情報が発信されることが多く、子育てのポジティブな面よりもネガティブな面に触れる機会が多いと実感している。そのため、漠然とした不安や恐怖を抱いて、育児に対して消極的に捉えていると考察した。

そのためこの企画の目的は、①親と児の交流・あそび場の提供により子育て世代のネットワークを促進、児の発達・社会性を促進する ②親と児が笑顔でいきいきと触れ合っている姿を学生がそばで感じることで、結婚や子育ての肯定的な側面を知ってもらう ことの2軸である。

3. 方法

1) 開催日程・場所

日時：令和6年8月25日（日） 9時半から 11時半

場所：和歌山県立医科大学三葛キャンパス

2) 対象

和歌山市内の0歳から3歳までのお子さんとその兄弟・家族
和歌山県立医科大学在学学生

3) 周知方法

- ・和歌山市子育て支援拠点「わかば♪」様にさまふえすのチラシ配布をご協力いただいた。
- ・大学生へは、保健看護学部内でSNSを通じてチラシを配信した。

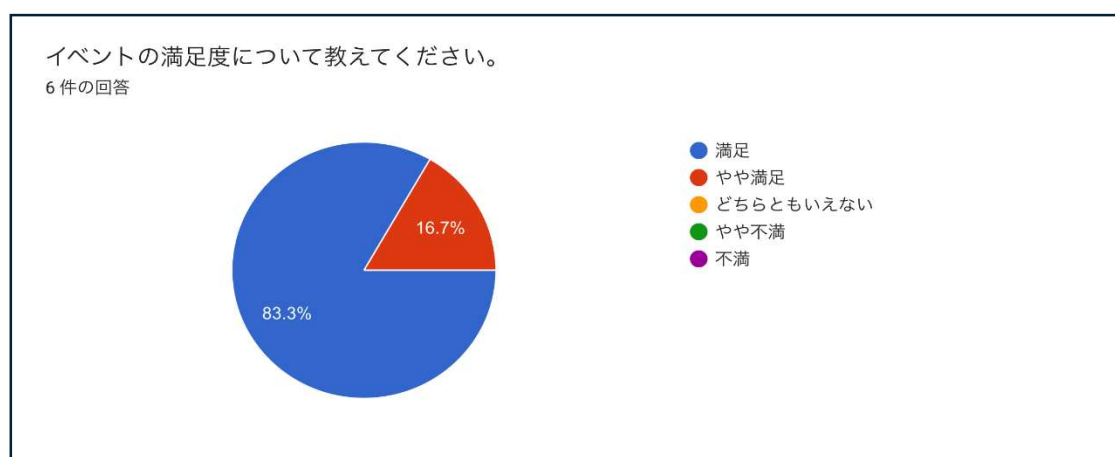
4) 内容

イベントの主なコンセプトは、兄と兄同士、親と親同士、親と支援者、兄と親と大学生同士が繋がりを持てるようなイベントで、人の輪を大切にして繋がりを持てる内容を考えた。夏祭りに関連のある様々な遊びのブース展開に加え、和歌山市子育て支援拠点「わかば♪」様に出店いただいた。また、わかば♪様のアドバイスを元に歌遊びの時間を設け、一緒に楽しく体を動かせるようにした。

4. 実施結果・評価

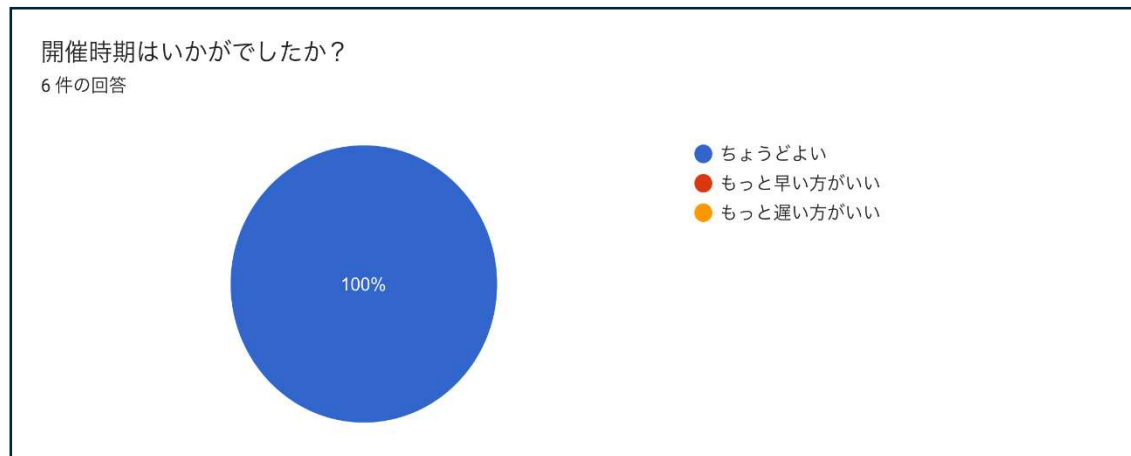
1) アンケート結果

さまふえすの参加者を対象にイベント後のアンケートを実施した。項目は1. イベントの満足度について、2. 開催時期について、3. 本イベントで最も気に入ったブースについて、4. 大学生やその他の参加者との交流について、5. 今後のイベントの参加意欲について、6. イベントの時間帯についてである。ここでは、アンケート結果とその結果の考察について述べていき、イベントを振り返る。

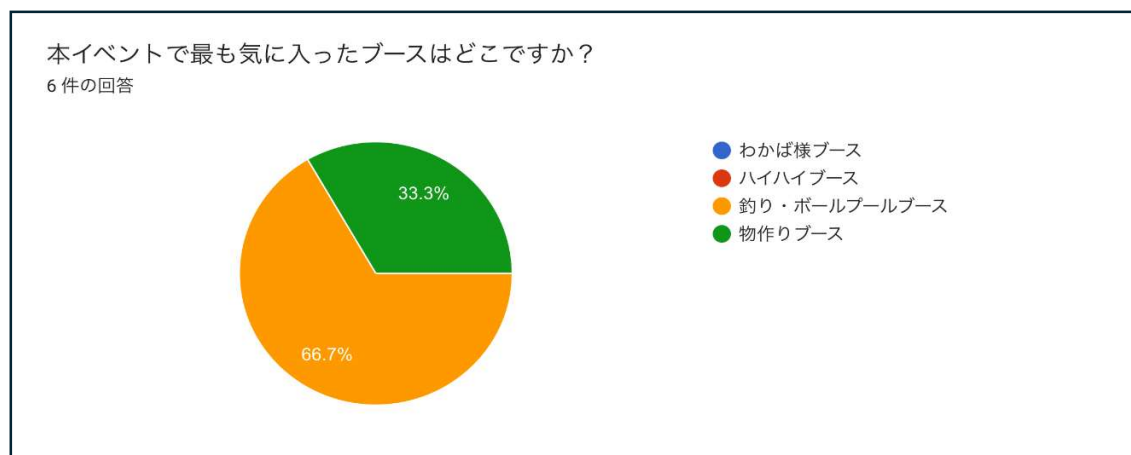


①満足 83.3%、やや満足 16.7%と回答者全員が満足感を得ていることがわかった。また、「いろんな場があって楽しかったです。日曜日で、パパもいっしょに参加できて喜んでいました。」「0歳には早いかなと思いましたが、ボールプールやおもちゃや絵本など何種類も用意してくれていて、すごく楽しめました。」「年齢別に楽しめる色んなブースがあ

ったから。きょうだいで参加しても退屈することなく楽しく遊んでくれた。」などというようにポジティブな言葉をいただくことができた。これらのことから、年齢別にブースを設置したことでそれぞれの年齢に対応して遊ぶことでできたこと、また日曜日開催であったため、家族で参加することができたことで高い満足度を得られたのだと考える。

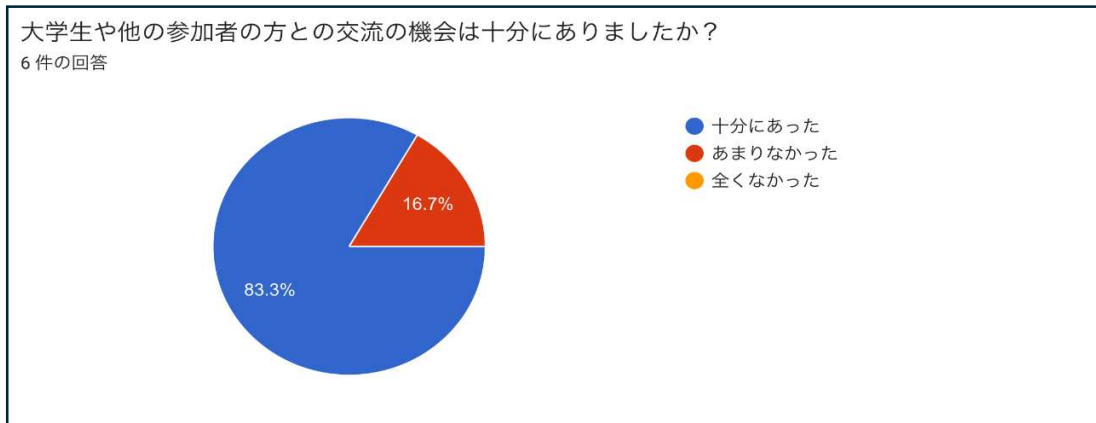


②開催時期は回答者全員がちょうどよいであった。夏休みにおける思い出の一つとしてイベントを開催することができたと考える。

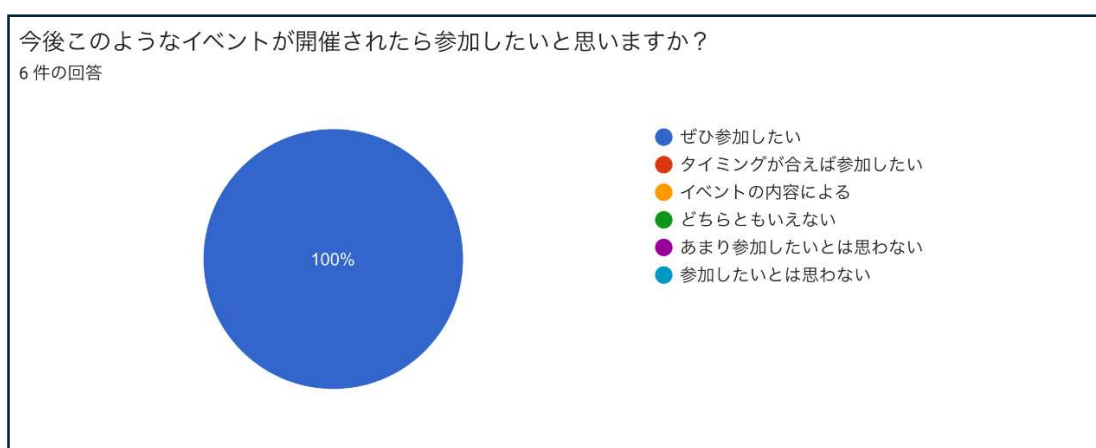


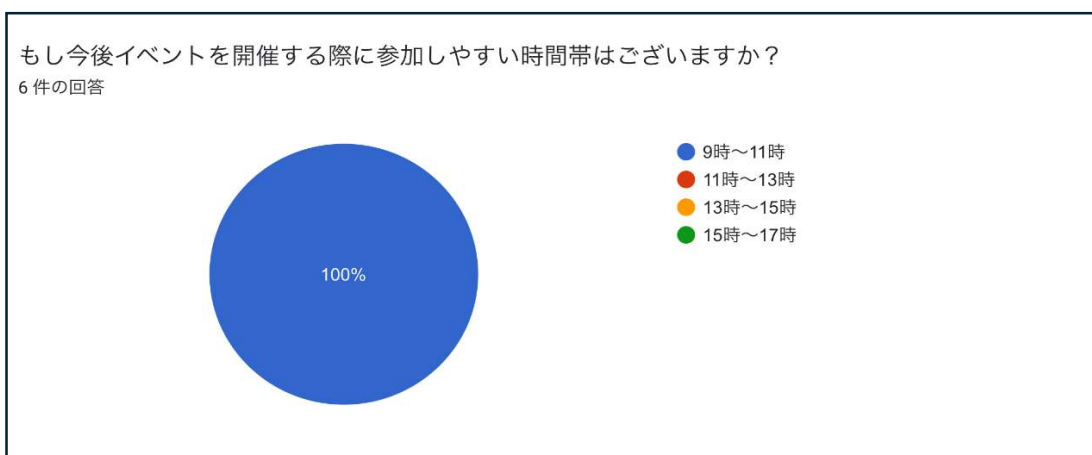
③釣り・ボールプールブースが 66.7%、物作りブースが 33.3%であった。ボールプールブースが特に人気であったのは、釣り・ボールプールを所有している自宅が少なく、子供たちが普段遊ぶことがないもので遊ぶことができたからであると考え。物作りブースについて、「子供がとても楽しそうで概ね満足しています。お土産も沢山、手形も取れて嬉しかったです。」「上の子がおめんを特に気に入ったようで、未だに家で被っています。おかあさんといっしょやいないいないばあなどのキャラクターなど、もっとたくさんあっていいのでは？と思いました。」という意見をいただいた。これらのことから、子どもたちが自分たちの力で物を作ること、嬉しさや達成感を得られたのだと考える。また、当初子供を対象としていた手形スタンプであったが、家族で手形を取る様子が見られ、子供

だけでなく家族にも需要があった。一方で、お面のキャラクターの選択肢が少なく、人気であるものに偏りがあったため、現在の流行を考慮してキャラクターを選択する必要がある。



④十分にあったは 83.3%、あまりなかったは 16.7%という結果であった。また、「ところどころ紙芝居や手遊び歌など、みんなで参加できたりとメリハリがあり、おかげさまで子どもも飽きずに過ごしていました!」、「優しく声掛けに来てくれて、お話しやすくてうれしかったです。」などという意見をいただくことができた。十分に学生や他の参加者との交流が得られたと感じた参加者がいる一方で、あまりなかったと感じた参加者があったのは、参加者数に対して学生ボランティアの数が少なかったことが一つの原因であると考え。今後は学生ボランティアの数を増やし、参加者が平等に交流機会を得られるようにする必要があると考える。また、子供たち同士、そして親同士で交流することができるようなイベントを増やす必要があると考える。





⑤⑥回答者全員がぜひ参加したいという結果であった。また参加しやすい時間帯については、今回実施した時間帯と同じ時間帯での回答が最も多かった。これらの結果から、昼食や夕食、昼寝の時間を考慮して時間を設定することができたことがよかった点であると考ええる。また、多くの参加者がまた参加したいと感じられたイベントを開催することができたため、「さまふえす」を開催することができた意義があったと言える。

5. まとめ

今回、さまふえすを開催することで和歌山市に住む多くの親子が集まり、親子同士でまた大学生とも交流する機会を作ることが出来た。ボランティア学生の感想から、子育てに対するポジティブなイメージを抱くきっかけが設けられたと考える。よって活動の目的であった「親と児の交流・あそび場の提供により子育て世代のネットワークを促進、児の発達・社会性を促進する」「親と児が笑顔でいきいきと触れ合っている姿を学生がそばで感じることで、結婚や子育ての肯定的な側面を知ってもらう」の両点を達成したと評価する。

また、当日は参加者や大学生に笑顔が溢れており、わかば様からも「有意義な時間だった。楽しいと多くの親御さんから言われた」とポジティブな意見が寄せられた。さらに、子供同士の交流も活発に行われ、新しく友達ができたと喜ぶ姿も見ることが出来た。今回さまふえすを開催して、参加した親子の様子やアンケートでいただいた声から親子が孤立することなく、楽しみながら育児ができる環境づくりを、大学生が1から企画することの大切さを学ぶことができた。看護学生が地域で行うイベントを企画することで、今後の地域実習で行う際の参考にできる貴重な機会となり、今後に役立つと感じた。当企画は、地域から求められているため引き続き開催していきたいと思う。

6. 謝辞

担当教員である岡本光代先生を始め、私たちの自主カリキュラムにご理解とご協力いただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

石川県災害ボランティア実施と

学生間の交流及びアクティブラーニング

和歌山県立医科大学 保健看護学部
3 年 後藤兼誠 松下己也 山上皓大
担当教員：狗巻見和

目的

1. 災害ボランティア活動を通して、被災者の生活復旧・復興及び心のケアを目的とする。さらに、現地の現状を自らの目で見て、ボランティア活動を体験することで今後予測される南海トラフ巨大地震に対する自己啓発を行う。また、同じ目的を持った仲間と出会い、交流することで新たな人間関係を築き、ボランティア活動を通して社会の一員としての役割を認識する。
2. 企画メンバーは、企画運営を通して計画力・実行力・コミュニケーション能力・リーダーシップを養うことを目的とする。また、活動を進める過程で様々な問題が発生するが、限られた時間と予算の中で問題を解決する必要があることから問題解決能力を養い、創造力・倫理的な思考を鍛えることを目的とする。新しいことに挑戦し、自分のスキルや能力を発揮しながら、この計画を成し遂げることで、今後のキャリア形成につなげる。

実施報告

1. 参加者

6/21～6/28 に和歌山県立医科大学保健看護学部 1～4 年生に対して、活動目的と内容を説明し、参加者の募集を行った。その結果、代表者含め、計 25 名の応募があり、最終参加者は 3 年生 8 名、2 年生 9 名、1 年生 4 名、計 21 名に決定した。

2. スケジュール調整(受け入れ先、宿泊先、移動手段など)

石川県穴水町および能登町の社会福祉協議会と連絡を取り、学生 21 名の災害ボランティア受け入れの可否、ボランティアのニーズと支援内容を確認し、能登町でのボランティア実施を確定した。確定後は、宿泊施設・ボランティア当日のスケジュールを決定した。

3. 活動資金の確保

和歌山県医科大学保健看護学部の先生方を対象に、寄付金を募った。その際は、ボランティアの活動目的と活動内容・寄付金の使用用途・集金方法(匿名、保健看護学部事務室内に募金箱設置)・問い合わせ先を明記した寄付金趣意書を作成し、先生方の研究室を訪室して説明を行った。結果、71,000 円の寄付金が集まり、寄付物資および、活動物品、交通費に使用した。

4. 実施前の準備

1)オリエンテーションの実施

7月18日と19日に設定し、参加可能な日程での参加とした。

[オリエンテーションの内容]

- ・参加者の自己紹介
- ・活動の目的と心得の共有
- ・準備物品とスケジュールの確認
- ・ボランティア活動に向けての心構え

動画「参加してみよう！災害ボランティア活動～活動の心得～」(八王子市社会福祉協議会)の視聴

2)活動計画書の配布

スケジュールを確定し、注意事項を含めた、活動詳細を作成し7月26日に配布した。

3)活動中の安全管理

・活動中のリスク管理として緊急連絡網、緊急連絡先および個別配慮事項表を作成
作成にあたっては参加者全員に対しアンケートを実施した。アンケート項目は参加者氏名、電話番号、緊急連絡先、その方との続柄、既往歴、アレルギー等の配慮事項である。緊急連絡網については活動日に全員に共有し、トラブルが発生した際に対応できる体制を整えた。

- ・活動中の連絡先との調整

担当教員および保健看護学部事務室といつでも連絡がとれるように調整し、緊急時の連絡体制を整えた。緊急連絡先および個別配慮事項表は代表者3名および担当教員と共有し、活動中の参加者の安全管理に努めるとともに緊急時に備えた。

5. 活動の実際

[1日目]8月1日(木)

- ・レンタカーの借用
- ・持参物品の準備

水分・塩分タブレットなどの参加者分

現地での物資提供分

- ・参加者との合流(参加者ら10:30に和歌山駅前に集合)

人数確認、注意事項及び支援の目的を説明し、石川県へ向けて出発

参加者間の交流を図る目的で配車は事前に決定

- ・参加者の健康と安全管理

13:00頃滋賀県のサービスエリアにて昼食休憩し、再出発する。

19:00頃石川県スマイルホテル金沢東口駅前に到着し、チェックイン後、次の日の行動内容、出発時間を説明し解散する。

[2日目]8月2日(金)

- ・現地での活動に向けて活動

06:00 人数確認と再度注意事項や連絡の取り方、連絡網における代表者を説明し、能登町役場内浦総合支所へ出発する。

08:30 頃に到着し、受付を済ませボランティア内容及び行動の仕方についての説明を受ける。各々が活躍出来るようグループを編成し、各チームで軽トラックや乗用車に乗り合わせ支援を要する場所へ出発する。

16:00 頃、怪我の有無、体調の変化の有無を確認し、現地を出発する。

19:00 頃ホテルへ到着し解散する。

[3日目]8月3日(土)

10:00 ホテルのチェックアウトを済ませ、和歌山へ向け出発する。

17:00 頃、和歌山駅に到着し、全員の健康確認を確認し、ボランティア活動を解散する。代表者3名は、レンタカーを返しに行く。

[活動終了後]

活動日の写真を含めた、寄付金報告書を作成し、先生方に活動報告を実施した。また、参加者にこの活動に関するアンケートを送信した。

学び

1. 被災地の現状とボランティアの必要性

能登町でのボランティア活動を通して、私たちは災害の爪痕を目の当たりにした。家屋の倒壊や土砂崩れ、生活インフラの寸断など、テレビや報道では伝えきれない現地の状況を肌で感じ、災害の悲惨さと復興の大変さを体感した。同時に、復旧・復興に向けて懸命に努力する人々や、温かく迎えてくれる地域の方々の姿に感銘を受けた。

ボランティア活動では、家屋の片付けや清掃、物資の運搬など、地道な作業を通して被災者の方々の生活を支援した。直接的な支援を通して、被災地の方々から感謝の言葉をいただき、自分たちの活動が少しでも役立っていることを実感した。また、私たちを含め多くの地域からの支援・支えによって少しずつ復旧・復興していることが分かった。

このような学びから、発災直後だけでなく継続してボランティア活動を行う必要があり、募金や物資の寄付だけでなく現地でのマンパワーが重要となってくることが分かった。

2. ボランティア活動の難しさと課題

ボランティア活動は、決して簡単なものではなかった。慣れない作業や厳しい環境の中での活動は、体力的に厳しく、精神的にも大きな負担となった。また、ボランティア活動の内容は、現地のニーズや状況によって変化するため、柔軟に対応する必要があった。

3. チームワークとコミュニケーションの重要性

ボランティア活動を成功させるためには、チームワークとコミュニケーションが不可欠であった。メンバーそれぞれが自分の役割を理解し、協力し合うことで、効率的に活動

を進めることができた。また、被災者の方々と現地スタッフとのコミュニケーションも重要である。相手の気持ちに寄り添い、丁寧に説明することで、信頼関係を築き、円滑な活動に繋げることができた。

今回の活動では、参加者全員が積極的にコミュニケーションを取り、互いを尊重しながら活動することができた。年齢や学部を超えた交流を通して、新たな人間関係を築き、チームワークの大切さを改めて認識した。

4. リーダーシップと問題解決能力の向上

今回の活動では、企画メンバー（後藤, 松下, 山上）が中心となり、活動の企画・運営を行った。計画段階から様々な問題に直面し、限られた時間と予算の中で解決策を探る必要があった。メンバーと協力し、情報収集やスケジュール調整などを行い、試行錯誤しながら活動を進めることができた。

また、活動前にリスクマネジメントを行い、緊急連絡網、緊急連絡先および個別配慮事項表を作成しておくことで、グループに分かれてボランティアを実施した際にも各チームリーダーを通して、活動状況を把握し、安全に考慮して実施することができた。

これらの経験を通して、リーダーシップと問題解決能力を向上させることができた。また、社会に出る上で必要となる、計画力、実行力、コミュニケーション能力も養うことができたと考える。

5. 南海トラフ巨大地震への備え

今回のボランティア活動を通して、南海トラフ巨大地震に対する危機感を改めて抱くことができた。能登町の被災状況を目の当たりにした今、もし同様の災害が和歌山で発生した場合、甚大な被害が生じることは想像に難くない。今後は今回の経験を活かし、防災意識を高めるべく、地域防災活動等に積極的に参加する必要がある。

また、我々は将来的に医療に従事する者として人々の命に対する責任を負う。災害発生時には、ボランティアとしての被災地支援に加え、医療専門職者としての責任を果たし、社会に貢献できることを目指す。

まとめと今後の展望

今回の災害ボランティア活動は、私たちにとって貴重な経験となった。被災地支援を通して、社会の一員としての役割を認識し、主に1～5.について深く学びがあった。

今回の経験を活かし、今後はボランティア活動に継続的に参加し、社会貢献活動に積極的に取り組みたいと考える。また、今回の学びを周囲の人々に伝え、防災意識の向上にも貢献したい。これらの経験や学びは人生における糧となり、社会に貢献できる人材へと成長し、次の世代へと継承できるよう取り組む。

地域で先進的な健康サポート活動に取り組む

薬局見学とインタビュー

和歌山県立医科大学 薬学部

4 年 西廻 一真

金子 千穂

曾和 穂乃香

担当教員 鈴木 渉太

作成日 2025 年 1 月 8 日

1. 目的

医薬分業が進展し、薬局を取り巻く環境が変化する中で、厚生労働省は 2015 年、患者中心のかかりつけ薬局・薬剤師に再編するために「患者のための薬局ビジョン」を策定した。そこでは、かかりつけ薬局・薬剤師が持つべき役割として、「患者の服薬情報の一元的・継続的把握」、「24 時間対応・在宅対応」、「医療機関等との連携」の 3 つの機能に加えて、「健康サポート機能」や「高度薬学管理機能」といった機能も患者のニーズに応じて整えるべきとされている。

このような状況の中で広島県を中心に展開する「オール薬局」は、地域の様々な医療・健康情報を発信する「健康情報発信基地」をコンセプトに、調剤だけでなく、管理栄養士主導の栄養カウンセリングや気軽にプロ仕様の測定機器で健康測定ができる「オールラボ」、薬局に併設するタニタカフェ、銀行など様々なサービスを提供している。先進的な取り組みを行う薬局を実際に見学することで、地域薬局の役割を深く理解し、地域の健康増進のために薬剤師がどのように貢献できるかを学ぶ契機とする。また、見学・インタビューを通じて得た知見を活動報告としてまとめ、今後の学びや実践に活かすことを目的とする。

2. 活動内容

2024 年 11 月 8 日、広島県を中心に展開する「オール薬局」グループの 6 つの施設を訪問した。各施設の見学に加え、薬剤師や管理栄養士の方々へのインタビューを実施し、薬局が提供するサービスや運営の工夫について具体的な情報を収集した。

表 1：訪問した 6 施設

	見学施設
1	YMFGオールヘルスケアタウン
2	オールファーマシータウン ゆめモール西条店
3	オール薬局 ゆめモール西条店
4	オールファーマシータウン呉
5	オール薬局 中通店
6	オール薬局 ハ丁堀店



図 1：見学施設をマッピングした広島市周辺の地図

3. 成果

各施設では、個室型の投薬カウンターを利用した薬剤師による相談対応や管理栄養士による健康相談、様々な健康測定機器の活用など、地域住民の健康増進を目指した多様な取り組みが行われていた。また、薬局の設計や運営の工夫により、患者のプライバシー保護や利用者の快適性が重視されていることも確認できた。以下に、施設ごとの特徴的な取り組みとそこで働く管理栄養士や薬剤師の方にインタビューを行った成果を記載する。

1. YMFG オールヘルスケアタウン

内科や小児科クリニック、日々の暮らしの中で自然と健康を取り入れるメニューを提供するタニタとコラボしたカフェだけでなく、地域住民の生活には欠かせない銀行も併設され、医療・健康・生活全般をサポートする複合施設である。また、管理栄養士が常駐し、健康状態を測定する機器が体験できるオールラボと呼ばれる施設が併設しており、地域住民が測定機器の体験後、その場で栄養相談を受けられる仕組みが整備されていた。1日の野菜摂取量を考えて作られた食事などが提供されるタニタカフェの利用でオールラボの測定機器を体験できるといった利用者の健康意識を高める効果を実感した。



写真：(左) タニタカフェとコラボしているオールカフェ
(右) 併設されているオールラボ



写真：オールカフェで提供されるランチプレート

2. オールファーマシータウン ゆめモール西条店

産婦人科クリニックが併設し、特に女性の健康（フェムケア）に焦点を当てている複合施設である。1 件目に訪問した YMFG オールヘルスケアタウンと同様、オールラボが併設されており、体の老化に関連する糖化度 (AGEs) や骨の健康状態など、多岐にわたる健康指標が測定可能であり、来局者が具体的な健康改善の目的を設定できる場となっていた。また、「オール健康くらぶ」というオール薬局グループが運営している会員制のプログラムについて伺うことができ、歩数測定ランキングやポイント付与を通じて、住民の健康維持へのモチベーション向上が図られていた。



写真：（左）オールラボで体験できる健康測定機器
（右）AGE s 測定体験の様子

3. オール薬局 ゆめモール西条店

オールファーマシータウンゆめモール西条の中にある店舗であり、完全個室型投薬カウンターが特徴である。投薬カウンターを個室にすることで、患者のプライバシーを守りながら薬剤師と安心して相談できる環境が整備されていた。また、調剤室では、薬剤の管理や監査の工程を見学し、大学の座学の講義では学べない実務の様子を体感できた。



写真：4つの完全個室型投薬カウンター

4. オールファーマシータウン呉

クリニック、オールカフェといった他のファーマシータウンにも併設されている施設に加えて、健康体操やヨガができるオール・ライフ・フィットネスと呼ばれる施設が併設されている店舗である。オールラボで働く管理栄養士の方から、オール薬局グループで実施している血圧測定のキャンペーンやエクオール検査など、地域住民の健康意識を高める活動について説明を受け、様々な健康に関する相談の場となることを改

めて実感した。また、オールファーマシータウンの中で唯一オール・ライフ・フィットネスを併設した店舗であり、薬局の枠を超えた総合的な健康支援施設であることを印象付けた。



写真：クリニックやタニタカフェ、フィットネスを併設したオールファーマシータウン 呉

5. オール薬局 中通店

オールファーマシータウン呉のすぐ横にある薬局で、半個室型の投薬カウンターが設置されている。半個室型の投薬カウンターの設計では、天井を低くすることによって、投薬時の会話が待合室に聞こえないような工夫がされていた。待合室には暖色系の照明が用いられ、患者がリラックスできる空間が提供されていた。

6. オール薬局 八丁堀店

繁華街のエリアにある店舗で、昨年の5月に利用者の増加に伴って投薬カウンターを増設した店舗である。中通店と同様に半個室型の投薬カウンターが採用されており、利用者がリラックスして相談できる環境づくりが行われていた。



写真：待合スペースと半個室型の投薬カウンター

表 2：成果の要約

	見学施設	成果
1	YMFGオールヘルスケアタウン	管理栄養士による栄養相談や健康測定機器の体験、栄養バランスを考慮した食事を提供するカフェによる地域住民の健康意識向上を実感した。
2	オールファーマシータウン ゆめモール西条店	併設するクリニックに合わせ、フェムケアに焦点を当て、健康相談や健康測定機器を通じて地域住民の健康維持を支援していた。
3	オール薬局 ゆめモール西条店	完全個室型投薬カウンターでプライバシーを保護し、薬剤師との相談が安心して行える環境を提供。調剤室での実務の見学により学びを深めた。
4	オールファーマシータウン 呉	栄養指導、健康測定機器の体験に加え、体操教室などを行うフィットネスの併設により、地域住民の健康意識を総合的に高める機能を担っていた。
5	オール薬局 中通店	半個室型投薬カウンターやリラックスできる待合室など、患者の快適性とプライバシー保護に配慮した設計が行われていた。
6	オール薬局 八丁堀店	投薬カウンターの増設により利用者ニーズに応えつつ、半個室型の投薬カウンターで落ち着いた相談環境を提供していた。

4. 考察

今回の活動を通じ、地域薬局が地域医療を支える重要な役割を果たしていることを改めて実感した。

個室型の投薬カウンターや栄養士による健康相談、併設されたクリニックと関連したケアへの対応など、多様化する患者ニーズに応じた柔軟なサービス提供が行われていた。個室型の投薬カウンターでは、患者のプライバシーを保護するだけでなく、照明やカウンターの配置などでも利用者の快適さを考え、患者さんが他の人に聞かれたくない情報や言いにくい情報でもリラックスして相談できる空間を作り出していた。また、様々な健康測定機器を導入は、利用者の健康意識を向上させる取り組みとして有効であると実感した。

タニタとコラボしたカフェやフィットネス、「オール健康くらぶ」のような取り組みは、地域住民が気軽に健康測定や相談を受けられる環境づくりに大きく貢献していた。地域薬局をベースとして薬剤師や管理栄養士が協力したサポート体制は、地域住民の健康意識をより向上させることにつながるため、今後他の地域でも取り組む価値があると感じた。

また、地域薬局・薬剤師は単なる医薬品の提供者としてではなく、様々な職種と連携して、地域医療の一翼を担う存在であるということを改めて実感した。

5. 結論

本助成事業により、患者のプライバシー保護や健康促進を目指した革新的な取り組みなど地域薬局が持つ可能性とその多様な役割について具体的な知識を得ることができ、今後の薬剤師としてのキャリア形成において大きな示唆を得る機会となった。

また、今回得られた知見は、地域薬局の可能性を広く共有することにおいても重要な価値を持つと考える。そのため、活動内容や学びの成果を整理し、活動報告として投稿する形で広く発信する予定である。

6. 謝辞

最後に、このような貴重な機会を提供していただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

7. 参考文献

“患者のための薬局ビジョン 概要”. 厚生労働省. 2015.

“地域包括ケアシステム”. 厚生労働省.

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/c_hiiki-houkatsu/index.html, (参照 2025-01-08)

“オール薬局”. マイライフ株式会社. <https://www.my-life.jp/owl/>, (参照 2024-12-24)

“オールカフェ”. マイライフ株式会社. <https://owl-pharmacy.jp/>, (参照 2024-12-24)